

平成 30 年度 子ども未来応援会議 議事録 【要約】

日時：平成 30 年 8 月 22 日（水）13 時 30 分～15 時

場所：藤枝市役所 3 階会議室

主催：藤枝市教育委員会教育政策課

子ども未来応援会議は、「教育日本一のまち藤枝」を目指し、次代を担う子どもたちを健やかに育成するための教育環境の充実を総合的に推進するために組織され、学識経験者や教員、保護者、関係団体など 17 名の委員で構成されています。

今年度は、教育振興行動計画に基づき各課において各事業が実施されている状況を確認のうえで、教育振興基本計画に掲げる「学びの環境づくり」に必要な課題等について、多面的・包括的に意見・助言をいただきました。

発言者	発言内容等
委員長	<p>【委員長挨拶】</p> <p>教育界の抱えるテーマは幅広く深く、みなさんからいろんな意見を伺う上で、意味のある会議として今日は盛り上がるようよろしくお願ひしたい。</p> <p>資料を見ながら考えてきたが、大変動時代が来た。かつての私たちの文化や生き方に関わる問題ではないか。一番分かりやすかった問題は、スポーツ界の不祥事である。普通では考えられないようなことがスポーツ界の常識になっている。それがスポーツ界の原点になっているということは、大変なことであり、私たちが責任を感じないといけない。今後どうするのかというのは生き方と関係があるのではないかと思う。</p> <p>2 番目に、生き方というと、4 月、6 月、7 月、健康長寿の問題の討論に参加する機会があった。長生きをするようになったので教育も変わらなければいけないのではないか。よくいろいろな方から、いくつまで生きるつもりかと聞かれ 105 歳だと答える。長生きをすると大変で退屈病になる。周りはみんな退屈病で死にそうで人生を無駄に送っている。退屈病との戦いは教育と関係ある。教育とは何かというと、人生を楽しむ、有意義に生きるということであるのに、偏差値をどうするか、日本中でどこの地域の偏差値が高いなど、こんな話題ばかりでよいのか。皆が今に退屈病になってしまうのではないか。人生長く生きる時代の教育とはどう考えるか、今日いくつか発言したい。沢山テーマがあり、いろいろな角度からご発言いただきたい。</p> <p>3 番目はグローバリゼーション。静岡空港は先日亡くなった斉藤知事が最初に発議されたが、静岡空港を作るのは、今日に至るまで大変だった。現在では、静岡空港は、地方空港の中で最も外国人が来日する空港となった。空港ができるとどうなるのか、外国人とどう接するかが問題である。先日、最近の新しい家電製品を見るため、ヤマダ電機に行った。そこで、通訳の機械を見て、英語を勉強する気にならなくなった。本当に素晴らしいネイティブの英語が出る。英語で話すと素晴らしくよい日本語が出る。これはどうなるのか。これは教育問題である。いろいろ考えることがある。大革命がおこる前兆</p>

	<p>ではないかと思う。</p> <p>今日も実りある発言がいただけるようよろしくお願いいたします。</p>
事務局	<p>【教育部長挨拶】</p> <p>お忙しい中、また大変暑い中、本会議に参加いただきお礼申し上げます。昨年度の本会議において、皆様の様々な幅広いご意見ご助言をいただき、無事に藤枝市教育振興行動計画の後期計画を作成することができた。重ねてお礼申し上げます。</p> <p>教育の問題では、平成 32 年度からの新学習指導要領により小学校 3 年生からの外国語活動の開始やプログラミング教育などの ICT 教育の問題、さらには先行している道徳の教科化等が加わっている。また、特別な支援が必要な子どもの増加や教員の多忙化、さらには子どもたちを巻き込んだ事件・事故の発生と、子どもたちを取り巻く環境が今激変をしている。</p> <p>原点にかえると、子どもたちの健やかな成長によって、私たちは何ができるのか、何をしなければいけないのか、そこを突き詰めていかなければいけない。学校だけでなく、地域、保護者、教育委員会が連携しながら、しっかりと考え、確実にそれを実行に移していくことが求められていると強く感じている。</p> <p>この会議では、市や教育委員会が行う教育施策について、委員の皆様の深い見識に基づいた幅広い視点からのご助言やご提案をいただける外部の有識者会議と捉えている。今後も、引き続き大所高所からの忌憚のないご意見をいただけるようお願いして本日会議開催にあたりあいさつとさせていただきます。</p>
委員長	<p>藤枝市教育振興行動計画 平成 29 年度までの実績及び平成 30 年度計画について、事務局から、資料の説明を求める。</p>
事務局	<p>藤枝市教育振興行動計画は、その上位計画である教育振興基本計画を具現化するための計画であり、基本計画に掲げた 3 つの目標に沿った施策体系となっている。</p> <p>29 年度までの前期計画では、19 課、165 事業、このうち 35 事業が再掲、28 事業においては、数値指標を定め、施策の推進を図ってきた。</p> <p>今年度からの後期計画では、27 課室、199 事業、このうち 45 事業が再掲。昨年、皆様から頂いた意見をもとに成果指標を 97 事業に拡大し、指標として目に見える形にすることで、子どもたちのより良い学びの環境づくりを推進していくものである。</p> <p>資料については、施策ごと、昨年度までの実績と今年度計画の主なものを文章でまとめ、うち 1～2 事業を「主な事業」として事業内容の詳細を記載している。</p> <p>本来なら全施策についてご説明しなければいけないところだが、時間も限られているため、この会議で皆様から戴いたご意見をどのように活かしたかも含め、一部だが説明させていただきます。</p> <p>【目標 I について】</p> <p>目標 I は『市民総がかりで子どもの未来を応援します』ということで、本計画の推進や、地域や家庭の教育力を高める事業が並んでいる。</p> <p>【施策 1 教育に関する市民意識の醸成について】</p>

自治会やPTAによるあいさつ運動や見守り活動など、大人が子どもの模範となる様々な活動、また、子どもが安心して学べる学校づくりを推進するピア・サポート活動など展開してきた。

今後についても、基本計画の理念に基づき、市民総がかりで子どもの未来を応援するため、あいさつ運動や見守り活動を引き続き支援するとともに、各学校では浸透しているピア・サポート活動の理念などについても、保護者や地域に効果的に浸透していくよう、市民への啓発、意識の醸成に力を入れたいと考えている。

【施策2 家庭教育を地域ぐるみで支援について】

ライフスタイルの多様化や少子化などにより、家庭で過ごす時間の減少や、子育てに悩む家庭が課題になっていることなどから、より一層の家庭教育への支援の必要性が高まっている。

貧困世帯やひとり親家庭が増加する中、一人で食事をする子どもが少なくないことから、こども食堂支援事業においては、今後の施策展開を研究・検討するためのモデル事業を立ち上げ、食事を通じて子どもの居場所を提供する市内の団体をモデル事業団体に指定し、実施にかかる経費の一部を助成した。

今後も引き続き、困窮家庭への経済的な支援や進学支援、特別な支援が必要な子どものいる世帯への就学奨励やペアレントトレーニングなどを通じて、家庭教育の向上に向けて支援していく。

【施策3 学校、交流センターを核に家庭・地域・学校等が一体となって取り組む教育の推進について】

学校で行われる様々な活動に地域住民が自らの知識や技能を活かしてボランティア参画する学校サポーターズクラブ事業をはじめとし、地域ぐるみで学校を支える活動が各地で行われている。ミシンや調理指導、地域の歴史学習など、積極的に地域の教育力を学校教育へ活用していただくことで、教員の子どもに対するきめ細やかな指導時間の確保や子どもたちが地域の大人と接することで思いやりの心や郷土愛の醸成に確実に繋がっている。

今年度から、新たにコーディネーター間の連絡調整を行う「統括コーディネーター」を配置し、これまでの取組を発展させ、より効果的に支援を行い、地域と学校の連携をさらに強化していく予定である。また、現在進めている小中一貫教育では、学校運営に地域住民が参画するコミュニティ・スクール化を推進し、地域と共に発展する学校づくりを積極的に進めていく。

【目標Ⅱについて】

目標Ⅱは『一人ひとりの子どもに未来を生き抜く力を育てます』ということで、子どもの育ちを支援する事業について掲げている。

【施策5 地域の実態に合った特色ある教育を小中学校接続で推進について】

平成28年度に策定した藤枝市小中一貫教育推進計画及び瀬戸谷地区の推進計画に基づき、平成29年度より瀬戸谷地区で先行して小中一貫教育を開始した。小学5,6年生が週

1 回中学校に出向いて授業を受けたり、中学校の教員が小学校に出向き乗り入れ授業を実施するなど、中学校の環境に慣れていける環境づくりを進めた。子どもたちはより深い指導内容を体験し児童生徒の探究心や学習意欲の高まりが感じられるようになり、一方、教員は児童生徒の発達段階への理解が深まり、小中学校の教職員間には指導に対する一体感や意識改革が進み、改めて小中一貫教育の有効性を確認することができた。

他地区の取組については、大洲地区で地区推進協議会を立ち上げ、協議を開始するとともに、コミュニティ・スクール化も同時進行で推進。またその他の西益津地区、広幡地区では、地区協議会の立上げに向けた準備を進めた。

加えて、本市が取り組む小中一貫教育を推進する 1 つの柱として、学習指導のつながりを明確にし、基本的な知識及び技能の確実な習得を目指すと共に、市内小中学校の全教職員が 9 年間を見据えた質の高い指導を行うため、藤枝市小中一貫教育カリキュラムを作成し今年度より導入を図っている。

今年度は、協議会が立ち上がった大洲地区をはじめ、西益津、広幡、岡部地区など、準備が整った地区から順次協議会を立ち上げ、各地区の小中一貫教育の推進計画とコミュニティ・スクール化に向けた検討を進める。

【施策 6 国際感覚を伴った英語運用能力の育成について】

全小中学校に英語指導助手（ALT）を配置し、小 5 から中 3 まで週 1 回のティームティーチングを行った。昨年度は、ALT を 1 名増員して瀬戸谷中学校区に配置し、小中一貫教育のモデル校としての実践を行った。

今年度は、平成 32 年度からの新学習指導要領に向けての移行措置期間として、小学校 3, 4 年で年間 15 時間の外国語活動実施に対応するため、ALT を新たに 3 名増員していく。その他、海外姉妹都市とのスカイプを活用した異文化交流の拡大や、ALT を活用した英語課外授業としての「Fujieda English Camp」の開催などを通し、引き続き国際感覚やコミュニケーション力の育成を図る。

【施策 8 確かな学力の育成と環境整備について】

子どもたちが授業が分かる、授業が楽しいという気持ちを体感させることが重要となることから、教職員の専門性の強化を図ることが必要であるため、ふじえだ教師塾やスーパーティーチャーの派遣などの事業を進めている。

また新学習指導要領では、情報モラルを含む情報活用能力の育成に対応するため、コンピューターや情報通信ネットワークなど日常的効果的に活用を図るために必要な環境、いわゆる学校 ICT 環境を整えることを明記されたことを受け、昨年度、学校 ICT 環境の整備に向けた検証を行った。具体的には、モデル 7 校に、タブレット端末、電子黒板、デジタル教科書等を導入し検証するとともに、併せて教職員の校務用パソコンを更新し教員の校務の執務環境の改善を同時に行った。検証の結果、子どもたちからは画像が映し出され分かりやすい、教員からは授業準備の時間が短縮できた、前時の振り返りが容易になったなどの成果が報告され、確かな学力の育成を図る上で有効であるという検証が得られた。

今年度は、モデル地区に整備した検証結果を踏まえ、全ての小中学校の全ての学年を対

象に ICT 機器を導入し、教育現場の ICT 化を推進していく。

【施策 11 特別支援教育の充実について】

近年増加している特別な支援が必要な児童生徒が、個に応じたきめ細かな支援を受けながら学べる環境を整備し、適正就学を推進するため、特別支援学級を新設、増設するとともに、特別支援学級支援員の増員や、巡回相談員による各学校への巡回訪問を強化するなど、特別支援教育の充実を図っている。また、ふじえだ型発達支援システム構築のための行動計画を策定し、幼児期から青年期までのライフステージに沿った切れ目のない支援体制の構築に努めた。

今年度は、小学校 1 校、中学校 1 校に学級を新設するなど、小学校 11 校、中学校 8 校に特別支援学級を設置し適正就学の推進を図る。また、特別な支援が必要な児童生徒への支援体制の強化に向け、特別支援教育に造詣が深い「特別支援教育士」の資格を有する人材を教育委員会にアドバイザーとして配置し、専門的な見地から、よりきめ細やかで時代に対応した特別支援教育の支援体制の構築を図っていく。

【目標Ⅲについて】

目標Ⅲは『だれでもどこでも学び合う環境を整備します』ということで、世代を超えた学びを支援する事業について記載されている。

【施策 14 広範囲にわたる学びのステージの提供について】

家庭や学校といった枠から離れて、地域の人たちとの関わりの中で自然、文化、芸術、歴史などに直接触れ、体験できる場を提供するものである。

代表的なものとして、放課後子ども教室では、現在 7 教室が活動中で地元の方からなる実行委員会が中心となって運営している。内容についても、自由遊び、ニュースポーツ、英語、料理、読み聞かせなど体験から学習まで地区ごとの特色あるメニューが用意され、地域で学ぶ場として大変有効な事業となっている。このため、新たな地区での教室の新設を模索しているところだが、運営の中心となる人材の発掘・確保が困難となっていて、新しい教室で開催されていないという課題がある。

以上、行動計画の 29 年度までの実績、30 年度の事業計画の説明とさせていただく。

【数値目標について】

数値目標に定めている 29 年度までの 28 事業の推移については、別紙「前期計画で数値目標設定がある事業の実績推移」にまとめてある。

平成 29 年度の数値目標の達成度を見ると、目標数値に届いていない事業も多々あるが、平成 25 年度からの推移として見ると、概ね数値が伸びており、各事業とも「施策のねらい」を実現するために確実に推進していることがおわかりいただけると思う。

なお、事業によっては、目標設定時の読みが甘いか、国や県等の方針が変わったことの影響により、進捗率が上がらなかった事業もある。

本日の会議では、前期行動計画の施策実践を踏まえ、本市教育についての現状の検証を行い、今後の施策の効果的な展開を考える上で皆様のご意見をいただきたい。

事前に配布した「会議においてご意見をいただきたいこと」に記載した、『ALT を擁した

	<p>「充実した英語教育」や『各種指導員を擁した「きめ細やかな特別支援教育」』をはじめとする、現在、本市が注力している主要施策について、また、『地域ぐるみで子どもを育てるための「地域の力」の活用』や『家庭の教育力向上に向けた親の倫理観や道徳観の高揚』などの課題に加え、委員の皆様からの専門的な視点から考えられる課題について、大所高所からのご意見をいただきたい。</p>
委員長	<p>大変量が多く多岐に渡っていて細かい点までいろいろと掲載されているので、質問に戸惑うこともあるかと思うが、今の説明から離れてもいいので、いろいろなご意見をいただきたい。今までも課題として地域ぐるみで子どもを育てるための地域力や倫理観、道徳観をどうするか、また、この大変動時代の中、多面的な価値観が多々言われている中で子どもたちが生きる力を育むにはどうしたらよいか。あるいは、これだけいろんなことをやっている現場の職員は大変であり、多忙化解消をどうするかなどいろいろな問題がある。それらを踏まえてご意見をいただきたい。</p>
団体代表	<p>資料に教育の出発点は家庭教育にあると書かれている。倫理観や道徳観の低下、家庭の教育力の低下が問題になっている世の中になったと感じている。最近、養護施設に視察研修に行ったが、以前は孤児だという目的で施設を利用する社会的養護の子どもたちが多かったが、今は養育機能や能力の低下や虐待等が理由の大半を占めており、家庭環境の驚かされる現状を見てきた。高洲南小学校の事件においても、アンケートでほとんどの児童生徒が学校は楽しい、いじめはないと回答している一方で、ニュースで見た例の少年の動機が小中学生の頃のいじめだというように、ほんの数パーセントの問題がとても大事で目を配らないといけないと感じた。</p>
学識経験者	<p>課題の中に倫理観、道徳観の問題があったが、大学の授業で地域の偉人を学生に調べて発表するというのを課題にした。最初は地元には偉人はいないと言っていたが、副読本である「私たちの静岡県」を見せ、調べてもらい、数分だけが発表してもらった。社会にどう貢献したか調べると、こういう人がいて自分のまちがこうなったから、自分も頑張ろうと思ったと、学生の正直な気持ちは分からないが、少なくともその瞬間はそう思って書いたと思う。そういう目標になるものがあると頑張れる。倫理観、道徳観を持っていて何の得があるのか損得勘定があると思うが、そういうところに少しは刺激になれたかと思う。徳目を押し付けるわけにはいかないが、周りの大人の姿でそれを示して、知識で獲得するより感覚で得る環境づくりを大人も子どももしていく。そういう環境を大人が作っていかないと、退屈病の方々、年を重ねて経験が豊富な方々にお手本を示してもらおう場を設定したら刺激になる。教育は子どもを見がちだが、人生 100 年時代になって、みんなが生き方を模索していく中で、先日 2 歳の男の子を見つけた 78 歳のおじいさんみたいな生き方もあるということを大人が示して、藤枝で共有できる環境を作ってもらえたらと思う。</p>
委員長	<p>静岡県の人は自分の県、まちのことを知らない。たとえば、学生に町の人口はどうか、議員さんはどういうことをしているか、そういう質問を仮にしても知らない人が多い。どんな人がどうやってそのまちの歴史を作り、どういうことで尊敬を集めてきたか聞いても知らない。今後の 1 つの大きな教育のテーマではないか。</p>
団体代表	<p>いろんな場面で先生方の変遷を見てきた。個人的な視点も入っているが、色んな価値観が多様化をしすぎている。悪いことをしてもビシッとやらないような世間になってい</p>

	<p>るので先生方も大変になっている。人として、何をしたら相手は喜び嫌がるか自分と相手との距離感やいろいろな関係の中で何が良くて何が悪いのか考えていけないといけない。あれがほしいこれがほしい相手が嫌がってもそれがほしいということを認めているので、大変な世の中になっているのではないかと思う。</p> <p>「ライフシフト 100年時代の人生戦略」という本を読んだが、勉強を学び、仕事をして、老後がある、それが60年、70年の時代になってきた。仕事をした先にまた仕事をしないといけないプラス30年ぐらいの時代になっているため、人々が生きていくための知恵、学びがないと退屈になってしまう。大変だと思わずいろんなことができるのでわくわくすると考えるようにしている。</p> <p>全国的なことでもあるが、廃業する事業者が多い。子どもたちが地元に戻ってきて仕事をする場面が提供できない時代になっている。地元にはどんなことがあるのかということから始めて、まちを元気にする施策を考えたり、子どもたちが地域をよく見て愛してもらいなどみんなで作っていけば、わくわくする子どもたちの未来が開けるのではないかと思う。</p>
委員長	<p>今、面白いチャンスが多い時代がきたと思う。新しい考え方をすれば、いろいろなことができる。次の世代がやれるように今から考えていきたい。</p>
学校関係者	<p>多様化という話があったが、子どもだけでなく保護者の意識の中にもいろいろな価値観があり、現場の先生はそれぞれ子どもの姿を見て保護者に対応していかなければならないということで先生方は苦労されている。小規模の学校にいますが、幼稚園から同じ仲間と同じ環境の中で育ってきた子が多いので多様化が受け入れられなくなっている。自分とは違うなと思う子がいた時に、相手の良さをなかなか受け入れられず人間関係が悪化することがある。だから小中連携や小中一貫教育に向けて進んでいくということは、子どもたちにとっては必要なことである。いろんな連携を通して、いろんな人がいることを知り自分を見つめ直すいい機会をいただいている。アンケートの話も出たが、子どもたちの楽しかったという数値の達成度だけではなくて、逆の面もどの学校でも大事にしている、楽しくないと回答した子はなぜなのか突き詰めて考えている。年間3回いじめのアンケートをしているが、子どもの回答を見ながら個人的に相談をしている。人間関係は大事であることから、ピア・サポート活動についてもどの学校でも学校経営、学校運営の中で、大事にしている、柱としてやっている。ピア・サポート活動はやっているが、保護者、地域に対し、どういったことがピア・サポート活動なのか浸透していない。学校教育を通して保護者と話をしなければならないと常々思っている。</p>
市民	<p>このような機会がなければ、藤枝市の教育についての取組がこんなに広く深く行われていると知ることはなかった。また、自分の県やまちのことを知らないということも胸に刺さった。いろんな保護者の方に、教育の施策のことが広く知れ渡るといい。家庭の教育力、倫理観の低下についても胸に刺さることばかりで、私自身も日中働いており、朝早くから夜遅くまで家を空ける時間が長く、子どもに寂しい思いや、親がいない中でやらなくてはならないことがあって負担をかけていることもある。ただ働かないと生きていけないという現状があり、日中に家庭、地域にいないことで子どもたちにどのような影響があるのか不安を抱えている親がたくさんいる。教育力、養育力の低下の中で、親も安心して教育や養育をしていけるような雰囲気があるといいと思う。この資料を見て、</p>

	<p>地域、学校の先生方に支えられていることを実感したし、親が安心感を得られるような社会になっていくといい。</p>
学識経験者	<p>生きる力が指導要領で大きく謳われるようになってきた中、確実に特別な支援が必要な子もいるが、生きる力を育てるための支援の仕方が、余計なおせっかいのようなものになっていないかを感じる。中には当然支援が必要だが、そうではない人に対しても、細かく支援しすぎている。自分の力で困難を解決する力をつけさせるために、もうすこし放っておいていい面があるのではないかを感じる。きわどい体験をさせて自分の一番いい加減をつかませていく中でしなやかな生き方ができるのではないか。最終的には退屈を楽しめる大人になったらいいのではないかと思う。多様な価値観を認め合いながら、その中で人間関係を知り、コミュニケーションがうまく取れるという基本は外してはいけない。みんな集まって毎日同じ顔を見て、教室で学習活動しているので、その中の基本は人間関係、互いの価値観を認めあうことが一番大切。部活動、スポーツ界の問題が出てきているが、これもああいう世界だったというのがわかってきている。いろんな説明責任問題が出てきているが、それを認めるわけではないが、そういう中で運動、部活を経験してきた人たちがその人なりの生きる力を身につけていた面もあるのではないかという気はする。もちろん体質は変わらなければならない。安全・安心な学校環境の整備でエアコンということが言われていて、今の流れで設置に向いているが、それによって熱中症の予防にはなるが、子どもの体の抵抗力、免疫力、暑さ寒さに対する体の適応力が下がるような気もする。夏場にインフルエンザがはやるようになりかねない、そんな反面的な要素も含んでいると感じる。ブロック塀や天井の落下は確実に予防していかないといけない。</p>
学識経験者	<p>大きく3つある。1つ目は、行政は数字を出して目標値をだすが、これは教育と一番似つかない。目標値が100人であるところ、30人だったとしても、どういう30人がここにきてどういうことを感じていったかという質が重要。たった一人でもすてきだよねと言ってもらえたら、それが教育、保育者の生きがいにも通じる。そうしたら、そもそも教育の数値というのはどうなるのか。教育のすごく難しいところであるが、数値ではなくどう感じたかということが大事である。</p> <p>2つ目、人間とは何か？教育は人間を育てる仕事であるが、人間らしさとは何か？何十年も追及している。チンパンジーやゴリラについて京都の研究所から本が出ていて読んでいるが、最近出た「ゴリラからの警告」「サル化する人間社会」には、人間らしさは共感する心とある。たとえば、バスや電車に乗った時、優先席に座る若者はあまりいない。でも普通席に座っている若者が、前にお年寄りや子ども、妊婦さんがいたとき席を譲るかということ、その確率は低い。でも若者からすると社会のルールは守っている。そうではなくて、人に共感する心が人間性だとしたら、そういう心を育てていくことが重要である。テレビでこの夏いろいろあるが、心が爽やかになるのは、人間の行動に共感した時である。いじめの問題も同様であり、嫌だと言葉や行動にしないと分からないのではなく、相手の気持ちに共感する心を育むことが重要である。幼稚園の子でも、言語でなくても分かる。体で覚えていく、体感を通して認知していくことが必要である。この資料にもある「幼児教育、0歳からのスタート」といったとき、乳幼児期の感覚、感性は経験、行動を通して育まれる。「ありがとう」と言う子にしたかったら「ありがと</p>

う」と言いたくなるような経験をどれだけ育てられるかということが乳幼児期に問われている。施策 7,9 に関するところが、人との関係性と創造性に関するところが重要視されているので、もう少しあってもいいのではないかと思う。教育とは何なのかみんな丁寧におさえることが大事なのではないかと思う。1 歳児の保育園の子が散歩に行くとうんちが気に入っていつも棒で触っていた。保育士はそれを面白いなと思って大事にしていたら、2 歳になって固いうんちになって転がったら、また面白くなった。その子が幼児期になったら、飼っているウサギのうんちで健康状態が分かった。現在、その子は獣医師をやっている。つまり、子どもは直ぐに成果が出ないので、大人が子供のやっていることを見て、良いことなのか悪いことなのか誰もわからない。そういう間とゆとりと幅がないと教育という営みができない。

3 番目は、課題としてあげられている、家庭の教育力向上にむけた親の倫理観や道徳観の高揚について、私が焼津市で教育に関わっている中で、保育士から今の親の酷い状況についての報告を受けた。昨日 39 度だったけど今朝下がっていたので連れてきた、さっき吐いていたけど今は吐いていない、朝は食べていません、など、保育士が困ってしまう親の状況が山のように出てきた。しかし、親は社会の中で生きている。バス、電車で赤ちゃんが泣いていると親は困った顔をして、周りの人は本当には嫌な顔をする。赤ちゃんは泣くことが仕事で、赤ちゃんが泣いたらみんなであやましようとしてスローガンをうたったら、お母さんはどんなに出かけるのが楽か。そのような背景から、0 歳児の 30 パーセントがスマホを使っている現状がある。お母さんは子どもと出かけるとき、子どもが泣くので必ずスマホを持っていく。スマホは光と音と時間で併せているので、子どもに見せると 5~10 秒で泣き止み静かになる。スマホを使ったら考える脳を作らない。機械の音波は脳の奥に入らない。人間の声で言葉をかけて、絵本を読んで、歌った方が考える脳ができてくる。だが、そういうところに親を追い詰めているのに、今どきの親の論理はって言っても、それだけで親は変わらない。親たちが何に悩んでいるか、悩んでいる親たちを見たときにいったい何ができるのか、地域の人たちは何ができるのか、そこに踏み込まない限り解決しないし、今の親の状況が分からないから今どきの親の論理はといったことを言う。今必要なのは、親を追い詰めるのではなく、今の親の状況を理解したうえで、スマホを頼らない子育てをするため、子育て経験者の知恵を出し合い、みんなで囲んでコミュニケーションを取り人間関係を築いていくこと。大切なことは、当事者はどう思っているのか。働いているお母さんたちに、幼稚園はお休みがあるが、認定こども園ではお休みの協力もするが、18 人の子どもが盆暮れ一日もお休みがない。月曜日から土曜日まで。夜寝た子の方が集中力があるし意欲的になると統計にでているため、今までの保育の子育てでは 20 時に寝かせることが理想だが、6 時半に迎えにきたお母さんに、それは言えない。なので、今どうしているかという 24 時間で園でできることとして、園の質を変えて夕方の保育を疲労と喧嘩が少なくなるような保育の実践を作りだしていく。夜 3 歳児が 10 時に寝ているのが 22 人中 2 人。9 時代が 19 人、8 時代が 1 人。お母さんが真面目じゃないかということそうではない。できない社会になっている。そういうことと絡めて教育を考えていかないと親の心に落ちていかない。なぜそういうことになっているのかがないと数字だけになってしまうのではないかと思う。

団体代表	<p>毎年教育関係の事業を行っている。施策7にあるスマイルキッズタウンについても5年前に藤枝青年会議所が50周年記念事業として作り上げてきた。子どもたちだけのまちづくりということで、やっている。ボランティアとして、子どもや大人、高校生も参加して行っている。学校では教えられないようなことを教育として教えられるし、教育といえば勉強だという風潮の中で、勉強だけではない、楽しさを教えるというところがこういう事業にはある。事業をひとつでも多く作りあげていくことが大事だと思う。</p>
学識経験者	<p>2つ前の学習指導要領でゆとりの話がでたとき、今は批判されることが多いが、人にやさしくできる、共感できるという数値は上がったのが実際のところで、ゆとり教育は成果があった。しかし、やはり次の教育改革となったとき、新しいものが増えてそういうものは消えていってしまうと感じた。新学習指導要領の全面実施ということもあり、今度は、地域に開かれた教育課程という形になっているので、この冊子で言うと1ページから6ページまで、地域の人材をいかに教育に入れられるかということで、藤枝市では一生懸命やっていて、学校の多忙化解消につながるかもしれない。逆転の発想をすると地域の教育力は学校に入らないといけない、今の学校教育は学校だけでは成り立たない、地域が入る学校教育でないといけないというのが藤枝市で浸透してきて少しずつ地域の教育力が上がったと実感した。特に民生委員や自治会の方が、教育推進協議会の中に入る可能性が高いことと、学校地域コーディネーターに地域のことを良く知っている方がなる可能性が高いこともあって、学校や家庭の問題を地域の方が理解をして、そういう方が中心になって催しや集会をやっている。</p> <p>夏休み中、寺子屋みたいな形で子どもたちを集めていろいろなことをやってくれたり、生涯学習センターが社会見学を企画してつれていってくれたり、学校教育とは違う社会教育や生涯学習みたいところが非常に新学習指導要領の改訂に伴って良くなってきたと実感する。それは歳の多い方がうまく関わっていて、そういう教育がとても重要だと感じている。逆に考えると夏休みに地域の方が協力してくださっているので、夏休みは学校の先生方が休めるように短くしないようにしていただきたい。</p> <p>2点目は、エアコンの件で、安全のところに記述はないが、今後どういう形になっていくのかわかったら教えていただきたい。</p> <p>3点目は25ページのところに部活動の外部指導者活用事業がある。学内研究の関係で静岡市の部活動の調査をやっているが、静岡市は部活動応援隊というものを企業や大学に呼びかけ、ライセンス制で講習を受けライセンスをとらせ、外部指導員と外部顧問という形で引率まで全部やらせる、学校の先生に部活動をやらないような活動を今推進している。来年度は中学校の全校におそらく外部顧問が入る。現場の先生、外部の顧問の方にインタビュー調査をしたところ、学校の先生は本当に外部顧問の方に平日も土日も全部任せることができるのか、例えば土日だけ来て平日は見てと言われると、土日の試合の様子も見てないのに平日指導できないなど、学校の先生は真面目なので、やってくれるからいいやとはならない。どこまでそれを委ねていいのか、また外部顧問の人間性や教育観は大丈夫なのかも含めて今調査をしている。</p> <p>私が教えていた去年4年生の大学生の子は、先生が部活をやらないといけないと言っていたが、今4か月教員をやって、この前研究室に来たとき、もう部活はいいですと言っていた。学校現場の本当の忙しさを実感していて、授業の準備が一番最後になってしま</p>

	<p>い、自分が何をやっているのかわからないけど毎日時間が過ぎていくぐらい、いろんなことがあって忙しいと言っていた。部活動は少し考えていかないといけないことだと実感している。</p> <p>藤枝市は外部指導者事業をやっているの、またそれが少しバージョンアップしていったらいいと思う。</p>
委員長	どうして部活は必要なのか、アメリカの学校はない。
学識経験者	クラブ活動というか、学校と切り離している。
委員長	アメリカにはプールはない。日本では、学校といえばプール、体育館となるがなぜなのか。部活の歴史はあるのか。
学識経験者	<p>体力づくり、健康づくりの一環で部活動が入っている。時代として考えていかないといけませんが、今部活動をやめようと話をしても、中体連という組織があって、インタビューの時に先生に聞いたが、私の部活だけ休みにする、その学校だけ休みにするとなぜ別の学校はやっているのにこの学校はやらないのかと保護者からそういう声が出てくる。</p> <p>静岡市は市一斉で月木は部活やらない、土日は一日しかやらないというのをガイドラインを作って、進めている。本来中体連の規約では、土日は一日しかやってはいけないことになっている。私が中学校で部活をやったときは、あったことは知っていたが、一度も守ったことはなかった。</p>
委員長	日本では、高校野球が選手を育てプロ野球に送り込んでいるが、メジャーリーグは部活動がなくてもあんなすごい世界がある。勝つことしか考えなければ違うのか。考えてみると不思議である。
市民	<p>地元で教育に対してどういう協力ができるかということ、教育そのものに物申すのはどうかと思うが、地元としては、1つは安全安心、つまり登下校に関する子どもの環境、登下校環境である。例えば交通問題や先般のような事例が起きないようにするなど、親御さん、高齢者の方とどういう形で協力できるか、具体的には見守り隊、そういったような形で登下校時の交差点での見守りを行っている。</p> <p>もう1つ、どういうことができるかということ、地元ならではということで、縦のコミュニケーション。ある町内で、夏休みに小学生を集め、ある高校の高校生にお願いして面倒を見てもらう。地域の親御さんがそれに協力して環境づくりや、子どもが勉強に疲れてきた時に少し遊べる様な仕組みをつくる。そういうような形で世代間の交流を図っている。寺子屋ということで、夏休みの宿題を行うなど、子どもが育っていくときに、学習環境を補完していけるようなことを地域で行っている。30年度計画の中でそういう方向を示されているのもいいことであると思う。</p> <p>子どもの教育については、社会からもう一度教育を眺めなおしてみる視点も必要。今企業が苦勞しているが、その中で企業としてはどういう人材を発掘していきたいと思っているのか。日本の将来を担っていく人とはどういう人が望まれているのか、どういう人なのか。以前ある場所で同じような発言したら、それは高等教育機関でやっているということで、小学校中学校あまりいい顔をされなかった。実際は小さいうちからどういう人を育てていきたいのか考える必要がある。たとえば、明治の社会では、小学校中学校中等学校、旧制中学校、一つのおおきな人材育成機関であって、それがいい悪いでなくて、これからグローバルな社会、今もすでにそうだが、ネットワーク自体が個対個。そ</p>

	うすると、どういう具合に統制、コントロールしていくかが課題。そういう社会にあって、自分でものを考え自分で判断し自分で実行していける。自分で見つけて自分で考える人材を育てていくことが必要になってきている。そういう視点から教育を見るとまた面白いのではないか。
市民	世間では高洲南小学校の事件があり、ああいう子たち、ほんの数パーセントの子たちに手を差し伸べる何かが必要。内に入っていけるような人材を作って心と心で会話できるようなそういった場所を作って、行政の人が窓口を作ってつなげていただきたい。形だけだと、腹割って話ができない、本当のことが言えなくなってしまうので、人と人との付き合いができる人を選んで、育てて、もっと深く傷ついている子、さびしがっている子たちにもう少しいい手を差し伸べてもらいたい。
学識経験者	大変動時代をひしひしと感じており、そういう世の中を生きていかなければならない子どもたちにどういった力をつけたらいいのかと思ったら、ひ弱や内向きでなく、どんどん自分から外に向かって発信したり、能動的に行動できる子を育てなくてはならないとつくづく思う。学校はいろんなことを抱えいっぱいの中で、地域の力をもっと活用できるのではないかと感じる。その時に大事なのは子どもを受け身にさせない、いつも与えられる存在にしておくのではなく、子どもをもっと大人扱いし、実社会の中で活躍させたり、貢献させたりという場を作っていくことが大事。だが、そのために新たに事業を起こすと大変で壁があるが、そうでなく今まである事業に対する大人の考えを少し変えるだけで中身が変わってくる。私の住んでいる地域では3年くらい前から防災訓練を変えた。今までは皆いやいや集まってリーダーの言うとおりに受け身で訓練に参加し、疲れて帰っていくという防災訓練だったが、ここ3年は集まってくるといろんな仕事を用意されている。例えばテントの設営や消火活動、お年寄りの家に行き安否確認に行く、担架で怪我人を運ぶ、援助物資の仕分け、配布などいろんな仕事を用意されていて、集まってきた人が自分がどの仕事をするか選ぶ、子どもも大人と同じように選ぶ、その時点で能動的に自分が主体者になっている。最初は無理ではないかと思ったがやるとできる。実際に災害があったときに即活用できるシステム。今まで子どもには無理だと思われていたことも大人と一緒にやらせることで子どもは大きな力になると分かった。地域でも人材不足が深刻だが、子どもの力も捨てたものではないとこの3年間思っている。そのことによって、地域の中で子どもの存在感が高まり、あいさつをするようになったり、意外だったのは、子どもたちがそのようなシステムになっていやいややるのかと思ったら、そうでなくてみんな目を輝かせて大人と一緒に喜び喜び動くし楽しげに活動する。主体的になるということがこんなにも人を変えようと思った。自分が有能であることを実際に感じることは大事。藤枝市は大人が手本ということを大事にされている。共に活動する中で、自然に子どもは大人の背中を見て育っていくなと思う。偉そうなことをいうのではなく、大人もかまえるのではなくそのままの姿と一緒に活動することが大事だと感じた。学校がやることは防災訓練に参加することを宿題にする、義務付ける、そして参加したら日記に書いて自分のことや安全、地域について何か考える経験をさせるだけなので、学校に負担をかけないし難しいことではない。ただ一つの行事の意識を変えるだけである。だから、子どもを必要以上に子ども扱わない。地域の有用な人材としてもっと期待して、頼って、何かをしてあげようや何かを与えてあげようと思うので

	<p>なく大人も一緒に子どもを取り込んでいくということが、子どもを育てる場なのではないかと最近感じる。数パーセントの子どもたちもそういう中で、救い上げられていくのではないかと考えている。</p>
市民	<p>体と心は身心一如、表裏一体であるため、体が元気なら心も元気ということで、体の話をさせてもらっている。やはり先生方が話されていたエアコンの設置に反応してしまったが、エアコン設置はもちろん異常気象なので必要なことだと思うが、子どもたちの筋力低下でより熱中症が出やすい状態になっているということも現実ある。子どもたちの抵抗力や免疫力を下げずにエアコンを併用していくことがいいと思う。日光を浴びない、運動をしないということで、より体調を崩しやすい状態にならなければいいと思っている。小学校の高学年に肩こりに起因する頭痛等で保健室に行く子が増えているので、またエアコンで冷えて新たな症状を抱える子が増えなければいいと思っている。自立神経のコントロールも悪くなってしまうと心配している。最近、保健の先生から、日常の姿勢を支えられない、骨盤を落として、背骨をまっすぐ伸ばして、頭を支えてというその姿勢が取れない子が多く、それを学校全体で改善していくのはどうしたらいいのかという相談を受けるが、姿勢を崩すようなゲームやパソコン作業が増えていることと、逆に発達していかなければいけない12歳までの大事な時期に股関節や肩甲骨周り、背骨を作っていく運動要素が減っている。必要なことが減って、悪いが増えている。なかなか学校の先生だけに姿勢を正しなさいと行ってその場でやれるものではない。正しい姿勢を子どもたち分かっていないので、難しいと思う。中学校に行くと、子どもたちにそのメカニズムやなぜ今運動が必要なのか、正しい姿勢とはどういうことか話をすると、こういう話は初めて聞いた、正しい姿勢をとることが人生にとってとても大事で、生きる力に直結すると理解できてよかったという感想をいただいた。中学生になると響くかなと思う。それを聞く機会もないし、親御さん、大人も姿勢が悪い。学校の先生や保護者にもそういう話を聞いてほしいと思う。運動器検診が年に1回か2回実施されて、背骨のチェックや手がしっかり右の横まで曲がるかというような昔は必要なかった項目が入ってきている。そういう検診への関心が低いというより、背骨がまがっているのはどうやってみるのか見方が分からない。そういうところも整形外科の先生と教育の関係者が予防のために検診を作ると思うが、保護者と協力して有効なものにしていかないと、チェックがもれて、だいぶ背骨が曲がってから病院に行って側弯症だと発見されるなど見落とされるケースが多い。側弯症がでるのは思春期や身長が伸びるとき、女の子に多く2パーセントくらいだが、その頃にコルセットをしなければいけないとなると、不登校になるお子さんもいる。コルセットをしてると恥ずかしいだったり、息苦しくて夜も眠れないなどいろんな悩みで中学校に行けず過ごされる方もいる。病院に行っても、側弯症に対しては曲がっていく最中は経過観察ということで治療はしない。日本では治療法は運動で改善するというのは、あまり認められてなく根拠がないと言われているが、ドイツは保険適用で側弯症がでてくる時期に少し正しい運動すれば、少し進行を遅らせられる、軽減できる、改善するということが認められている。扁平足で足が痛い、腰痛がでた、首が痛い、頭が痛いなど、からだの悩みで学校に行けなくなる、睡眠がしっかり取れないなど悩むことがないように、私はそういうところからかわれたらいいと思う。幼児期の平行運動、平均台やバランスボールの上で弾んだり、トランポリンやった</p>

	<p>りタイヤにつかまってぐるぐる回ったり、そういう平行運動をたくさんしているお子さんは側弯症がでない。京都の大学で6年間ほど調査したら側弯症ゼロの学校があった。側弯症ゼロはなかなかない。6年間だけなのでたまたまかもしれないが、やはり外で元気に全身運動をするほうが、整形外科的な疾患も出にくいとなんとなく言えるのではないか。藤枝市は体づくり事業ということで乳幼児期から親子でそういう体のことを知るイベントをやっていて、私も協力しているが、そういう地道な活動からその参加した人だけにしかお伝えできていないが、あとは学校の保健の先生と連携とりながら、学校に行ってなるべく子どもたちに伝えて、参加してくれるわずかな保護者にも伝えて、少しずつ広めていけたらと思っている。</p>
学識経験者	<p>今年の夏に文科省が学力テストの結果を公表した。県も発表した。数値が全てではないが、子ども未来応援会議というタイトルにもあるし、資料にも確かな学力の育成と記載があるので、こういう席で基礎データとして皆さんに示すのが当然である。掛川市は今年の夏に市としての全国平均と県の平均と比べるとどうか出していたが、藤枝市の場合はまだ発表していないのか。今分かっている範囲で教えていただけないか。当然それが全てではないが、この資料にも1つの大きな施策として記載があるので、やはりそれはここにいるみなさんに示すのが筋ではないか。この会議にはずっとかかわらせていただいて、その間にも何度かテストをやっているが、一度もこの場で公表していない。それは少しおかしいのではないか。子ども未来応援会議で、教育委員会からデータの提示がないというのはおかしい。新聞では大々的にでているし、それに対するいろんな先生方が論評していて、そこに読解力などいろんなものがある。子ども未来応援会議の中で様々な意見を重ねられているのだから、結果は教えてほしい。</p>
事務局	<p>市としての状況についてはまとめてあるが、今後その結果を分析してまとまったところでホームページ上に公開という流れを考えていたので、この場で発表ができなかった。本年度4月に行われた全国学力学習状況調査の結果、小学生6年生は、国語A、国語B、算数A、算数B、理科、5つの区分があるが、いずれも国、県の平均正答率を上回る結果が出ている。中学校では、国語A、国語B、数学A、数学B、この4つについては、小学校と同様、国、県の平均正答率を上回る結果が出ている。理科については、国の平均正答率は上回っているが、県の正答率とほぼ同じだが、数値上、若干下回る結果となった。</p>
学識経験者	<p>小学校6年の場合は、県の場合は、全国の平均をかなり下回る場所が多かったので、そういう意味では、これまでやってきたことが、間違っていなかった。それだけでいうわけではないが、そういうのはどんどん公表していったほうがいいと思う。</p> <p>ここに課題として挙げられているが、やはり今子どもも先生も手いっぱいである。新しい学習指導要領が入れば、さらに忙しくなる。これはもう目に見えているので、いかに先生が子どもに向き合えるようにするかが課題だと思う。ここ何年も言われているが、先生は本当は子どもに向き合いたい、向き合うことができない、文科省や県教委からの様々な調査、モニターペアレントとの対応、それから給食費など庶務的な作業に追われて、子どもに向き合えない。やはり、教育日本一を掲げる藤枝市なので、徹底して先生を雑事から解放して、子どもに向き合えるようにしてもらいたい。財政上の問題もあるかもしれないが、例えば、もうすでにやられているのかもしれないが、別の方に庶務をやってもらおうなど。部活動では、私の友人の奥さんも言うが、部活動の指導は嫌い</p>

	<p>ではない、やりたいという思いは持っているが、とてもではないが無理である。部活動は市長も言っていたが、切り離して、外部指導員を徹底して調べて雇ってってもらいたい。そういうことをして、先生を普段子どもの勉強だけでなく、日頃の学校内での様子など、目が行き届くように、雑事から離していただきたい。それはやればできると思うし、うまくいけば、先生が藤枝市の学校で働いてみたいという声が出てくると思う。もし藤枝市がそれを本当に実際すれば。そうすれば逆に教育日本一の成果がさらに高まるのではないか。磐田市では、ラグビーでスクールをやっているが、藤枝市もサッカースクールがあると思うが、そういう外部で部活動ができるよう推進してもらいたい。</p>
事務局	<p>今回も大変多くの、また私たちも気づかないような点をご指摘いただき、正直痛い点をつかれた部分もあった。多方面から、多くの貴重なご意見をいただき、大変感謝申し上げます。本日皆様からいただいた意見を、今一度事務局で整理し、本行動計画に掲載された各事業を執行していく上で参考にし、取り入れていけるものは取り入れていきたいと考えている。また気づいた点があったら、教育委員会教育政策課によせていただく中で、改善できればと思うので、お知らせいただきたい。本日のご協議に感謝申し上げます。</p>